

# adhimukti y śraddhā

—譬喩・信解・藥草喩品を中心として—

望 月 海 淑

1

妙法蓮華經藥草喩品の第一の偈は、次のようにのべられている。

破<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>法王 出<sup>ニ</sup>現<sup>ニ</sup>世<sup>ニ</sup>間<sup>一</sup> 隨<sup>ニ</sup>衆<sup>ニ</sup>生<sup>ニ</sup>欲<sup>一</sup> 種<sup>レ</sup>種<sup>レ</sup>説<sup>レ</sup>法<sup>①</sup>

有を破するとは、bhava nardana<sup>①</sup>であるが、bhava は存在しているものの意味であるからとて、この世にあるすべてを破壊し尽すというような文字通りの破壊者ではない。仏が目的とするものは、世にあるものを壊し尽し、全く新しいものを create しようというものではなくて、存在するものに対しての誤解・偏見を正し、ありのままにものを見るといふ心を養わせるところにあるから、破有は、存在しているものに対する従来の見解を破り、正法の立場に立つてものを見させようといふことを意味する。bhava が有と訳されるのも、存在するものは、いつも常にあるものだという偏見を示すためであり、その点で有は、煩惱と業とによって生れた衆生としての生存とさ<sup>②</sup>えいわれる。したがって、破有というのは、煩惱を離脱し、業を離れ、仏の本道に入らせるといふことを意味するから、その人は

法王 dharmarāja へ仏である。

衆生の欲に随つてとは、仏に対する衆生であるから、仏に対して衆生が教えを説いて欲しいとする欲を意味して  
るだろう。従つて種々に法を説くのも、その欲の浅深によつて正法に入るための法を説くのだと考えられる。

そこで、この欲とは一体、どのような内容のものであるのだろう。

如上の事は、事理明白なところである。しかし、その明白なことを長慢な文字をもつて綴つたのは、実は衆生の欲  
という、その欲の訳語に著目しなかったからまでのことである。

随衆生欲と訳された言葉は、 dharmam bhāṣami satvānam adhimukti vijānīya となつてゐるが、この中で欲  
と訳された言葉は、 adhimukti であることは明白である。

adhimukti という言葉について、我々法華經關係者に熟知されている文章は、信解品第四の表題の adhimukti  
parvata であり、分別功德品第十七の eka citōtpādika py adhimuktir utpādita bhīṣṭradhānata である  
う。信解品では信解と訳され、分別功德品では śradha と一緒になつて信解と訳されて、法華經信奉者のとるべき行  
いの重要なあり方の一つとされているのに、ここでは「欲」と漢訳されている。欲という言葉には、ねがう、のぞむ  
などの願ひ求める意志を示す意があるので、奇異な感はないのではあるが、ただ信解と訳される adhimukti の言葉  
の訳語としては、極だつて使用例がちがうように思われるのだが、何かの理由があるのだろうか。

しかし、仏法を理解するのに、憶測は不必要なことである。そこで正確を期するために正法華經を見ると、そこ  
は

為衆生説法 隨其所信樂<sup>⑤</sup>

とあって、*adhimukti* が信樂と訳されていることを知りうる。信樂とは信じ樂うことであるが、信という言葉は人と言との合字であり、信は人の心中を表にすることで、偽なきもの、故に信はまことを意味する。<sup>⑥</sup> ものであるからただ欲し願うというよりは、もっとつきつめたニューアンスを持っていることを知りうる。ただ正法華経には何故か信樂という使用例が多くて、方便品だけで四箇所、譬喩品・信解品で二箇所等の使用例を見ることが出来る。<sup>⑦</sup>

2

*adhimukti* という言葉は、藥草喩品においては、もう一箇所で使用されているが、ただこれは藥草に関する物語のところであるから、妙法華経には訳例を見ることが出来ない。三草二木の譬が終って、釈尊はすぐに仏の指導が公平に行きわたることをのべようとして、

*sattvesu yathādhimukti makā yānika pratyeka buddha yānika śrāvaka yānikesu……*<sup>⑧</sup>

と、衆生たちにおけるそれぞれの *adhimukti* によって、偉大な乗物、独覚の乗物、声聞の乗物の間に、正法の教示が公平に行なわれるとのべている。この *adhimukti* の訳について正法華経は

隨二心得一 各得其所<sup>⑨</sup>

と訳出しているから、それは菩薩や緣覺・声聞たちの心の所得ということになるだろう。するとそれは、この人たちが自分の能力に応じて心から求めたものにしたがった、ということかもしれない。

藥草喩品のこれらに対して、信解品では、数多くの *adhimukti* に対する訳を見ることが出来る。

信解品の品題がまづ *adhimukti* なる言葉であり、正法華経はこれを信樂品と訳しているのであるが、不思議なことにその文章の中にあられて来る部分では、信解の訳語を妙法華経の中に見ることが出来ず、正法華経の場合は、

信樂の訳語を二ヶ所に見るだけである。信解品は一仏乘の説法を聞いた須菩提・迦旃延・迦葉・目犍連の四人が、自分らが領解したことを喜びをもって積尊に語ったものであるが、彼等は自分の言葉の締めくくりの部分において、自らの心を反省して、小法しか楽わなかったのは間違いだたとのべているが、その中において沢山な *adhimukti* の言葉が使われている。

*upāya kauśalyena tathāgato 'smākam adhimuktiṃ prajānāti* ⑩

如来は所々の *adhimukti* を認識しているので、巧みな方便によって教えを説いたのだ、と言おうとするところであるが、妙法華経はこれを

仏知<sub>三</sub>我等心樂<sub>二</sub>小法<sub>一</sub> ⑪

と訳しておるが、これよつてみると、*adhimukti* を樂小法と訳したことが解るが、樂小法というのは、四人が求めたものが声聞の道であったことを示すもので、それを樂つたとすること、*adhimukti* に小法の意識を加えたものであらう。これに対して正法華経は、

世雄大通善權方便。知<sub>三</sub>我志操不<sub>二</sub>解深法<sub>一</sub> ⑫

と訳しているが、我が志操では深法を解せざるを知つてという言葉は、やはり四人の人々の心が最上の仏乘を求めようとしなかつたことを示しているが、これらから理解出来ることは、*adhimukti* という言葉について、何かを求めようとする心のあり方として理解したもののよつて考えられる。

このよつて理解されうる理由は、信解品の中で使われている *adhimukti* に対する訳語の大部分のものが、樂う、という意味合いにおいて使用されているからである。

信解品の文章における数多くの *adhimukti* の使用例を列記する繁雑をさけるために、これらを表にして例記すると、それは次のようである。

Kern 本	妙 法 華 経	正 法 華 経
<i>hinādhimuktāḥ</i>	而但樂 <small>ニ</small> 小法 <small>一</small>	下賤怯弱
<i>adhimukti balaṃ</i>	有樂 <small>ニ</small> 大之心 <small>一</small>	親心信樂
<i>hinādhimuktikā</i>	樂 <small>ニ</small> 小法 <small>一</small> 者	下劣志願小者
<i>adhimukti balaṃ</i>	無 <small>ニ</small> 心有 <small>レ</small> 所 <small>ニ</small> 怖求 <small>一</small>	意識にてなし
<i>hinādhimukto</i>	愚癡狹劣	為 <small>ニ</small> 下劣極 <small>一</small>
<i>hinādhimukto</i>	愚劣樂	下劣底極
<i>hinādhimuktin</i>	志意下劣	為 <small>ニ</small> 下劣極 <small>一</small>
<i>hinādhimuktiva</i>	知 <small>ニ</small> 我樂 <small>レ</small> 小	親 <small>ニ</small> 見下劣 <small>一</small> 樂 <small>ニ</small> 喜小乘 <small>一</small>
<i>adhimuktin</i>	無 <small>ニ</small> 願樂 <small>一</small>	余徒欽樂
<i>hinādhimuktaraṃ</i>	知 <small>ニ</small> 子志劣 <small>一</small>	令 <small>ニ</small> 我信樂 <small>一</small>
<i>hinādhimuktām</i>	知 <small>ニ</small> 樂 <small>レ</small> 小者	志樂下劣
<i>adhimuktin</i>	種種欲樂及其志力	所慕樂願

〔註〕各段の下の数字は、それぞれの頁数。

右の表の中、四番目の *adhimukti* *balam* に対する妙法華經の訳文は、正確には、この言葉の後に続けられる、無欲であったにも拘らず、という部分と合わせ訳されたもののように思われ、正法華經は、釈尊が悟りに到達された菩提樹下の物語を記し、完全に意訳をなしている。

*hinadhimukti* の語は *adhimukti* に *hina* がつけられたもので、*hina* は劣ったという意味をもっているので、劣った *adhimukti* だということで、楽小法と訳され、愚癡狭劣と訳され、志意下劣と訳されたものだろうが、妙法華經に見られるこれらの訳語に共通するものは、何かを楽う、という意味において理解せられていると思われる。正法華經の訳語も信樂、下劣底極等の訳が多いのも妙法華經の場合と相通するものであり、最初の下賤怯弱の訳語も、妙法華經の楽小法と同じ意においてなされたものと思われる。

以上のように、信解品と藥草喩品とに見られる *adhimukti* の理解のしかたは、何かを願うという心のあり方をのべるもの、として理解せられていたように思われるのだが、こうした意味あいにおいて理解せられていたとするならば、冒頭に掲げた藥草喩品の随衆生欲という言葉の欲も、何かを願おうという欲として理解することが出来るように思われる。そして、この何かというのは、自己を反省してみるときは今迄の下劣なものを願ったことであろうし、前進しようとする時は、更に大きな目標を願うということなのであろう。

岩波版の法華經の中で、岩本裕博士は、この *adhimukti* について多くの場合について、「意向」という訳語を使っておられるが、この訳も、何かを願う、という意味あいを示そうとしたものだと思われる。<sup>(13)</sup>

3

これらの訳に対して信解品の品題における *adhimukti* は妙法華經では信解と訳され、正法華經では信樂と訳され

ているのであるが、正法華経の訳語の信樂の語は、註の⑦にあるように、*adhimukti* と *śraddha* の二つの語に対して使用せられており、妙法華経においては、方便品の

*buddha dharmesu śraddadhādhvam* ⑬

仏陀の法を信ぜよ、というところで、一心信解と訳しているように、*śraddha* の語をも信解と訳出していることを見ることが出来る。このような事例からして、*adhimukti* について考える時、同時に *śraddha* についても考えてみなければならぬ問題も生じて来るわけである。

そこで、薬草喻品の中に見られる *śraddhā* の語を見ていくと、薬草の喩の中の二箇所はこの言葉を見出すことが出来る。最初の箇所は、釈尊が迦葉にむかって生まれながらに盲目の人の性格について

*andhaḥ puruṣas teṣāṃ puruṣāṅgāṃ na śraddadhāyān* ⑭

と、生まれながらに盲目の人は、かの男たちを信用しないであろう、と語ったところの言葉の、*śraddhā* であるが、

この言葉を正法華経は

有て対説者一 其人不レ信 ⑰

と訳して、*śraddhā* は信であることを示し、もう一箇所は、

*yo 'haṃ pūrvam acakṣamāṅgāṇāṃ na śraddadhāmi nōktaṃ grhṇāmi* ⑱

目が見えるようになった件の男が、盲目の間、他人の言葉を信じなかったことを悔いて、私はかつて話されたことを信ぜず、言葉を受け入れなかった、とのべる所であるが、ここの *śraddhā* をも、正法華経は

爾乃取レ信尋自剋責。⑲

と信と訳している。

そこで、念のため信解品を見ると、迦葉が第二十番目の偈の中で

na śraddadhī mahyam imāṃ vibhūṣitāṃ piṭā  
manāyaṃ ti na cāpi śraddadhīḥ<sup>(21)</sup>

窮子が卑賤な境遇で育って来たために、この莊飾を私のためのものと信ぜず、この人が自分の父であると信じないと釈尊にむかって自分の心のあり方を表白しているが、ここで見られる 'śraddhā' の言葉に対して、妙法華経は

不<sub>レ</sub>信<sub>二</sub>我言<sub>一</sub> 不<sub>レ</sub>信<sub>二</sub>是父<sub>一</sub>

と信の字をもって訳し、正法華経も

亦不<sub>レ</sub>細<sub>レ</sub>信 彼是<sub>二</sub>我父<sub>一</sub><sup>(22)</sup>

信の字をもって訳出している。そして又、その第四十三偈においては、

na cātra kaś cid bhavatiḥa dharmo evaṃ tu  
cintetva na bhovī śraddhā<sup>(23)</sup>

と、迦葉は釈尊にむかって、この世においてこのような法はない、と、このように考えて信じなかった、と語っているが、ここに見られる 'śraddhā' の語に対して、妙法華経は

如是<sub>二</sub>思惟<sub>一</sub> 不<sub>二</sub>生<sub>レ</sub>喜<sub>レ</sub>樂<sub>一</sub><sup>(24)</sup>

と訳して、一切諸法は皆、悉く空寂にして生無く滅無く、大無く小無くして、無漏無為なればなり、として、'śrad-'  
'dhā' を喜樂と訳しているが、これは恐らく、この前の偈が、喜はなかった nāsmāka harṣo 'pi kadā ci bhovī と



るところから、喜びの言葉を連らねたものか、と思われる。これに対し正法華経は、

由三思想<sup>②</sup> 不レ成三仏道<sup>①</sup>

と訳している。ここでは信じなかったという言葉が、仏道を成じないというように変わっているのであるが、信が仏道を成ずる途につながるような意味合いが感ぜられて興味深いものと思われる。

以上、見て来たところによると、信解品と藥草喻品において見られる *śraddhā* について、信解品の四十三番目の偈を除いては、信と訳出されていることが解るのであるが、*śraddhā* が信ずるという意味あいを持つものならば、それは *adhimukti* の何かを願うという心のあり方、意向よりは、より一層強く人間の仏に対する敬虔な心のあり方を示す言葉として理解してもよさそうに思われる。

4

そこで念のために、譬喻品における両者の使い方を見てみると、そこでは *adhimukti* と *śraddhā* の使用例を数ヶ所に見ることが出来る。

*adhimukti* に関しての第一は、方便品の教えを聞いた舍利弗が、我々は邪見を離れたことで涅槃を得た、と思つていたと語るのに対して、世尊が語った言葉の中に見られるもので、<sup>②</sup>

*nānā 'dhimuktānāṃ satvānāṃ nānā dhātṷ āśayānām*

種々な *adhimukti* をもつ欲望をもつ衆生らの、と *adhimukti* の言葉が使われているが、これに対しての妙・正阿法華経はともに意識をなしており、この語をどのように理解したかは明白ではない。

もう一ヶ所は三車火宅の喩の中で、父が子供らの種々な珍玩・奇異の物を欲するのを知つていう所で、

aśaya jño bhaved adhimuktiṃ ca vijāniyāt<sup>(27)</sup>

と語られるものだが、これに対する妙法華経は

先心各有<sup>三</sup>所好。……情必<sup>三</sup>樂著<sup>(28)</sup>

と訳されており、adhimuktiを樂著と訳しており、正法華経も次の如く、好意と訳している。

時父知<sup>三</sup>子各所<sup>三</sup>好喜<sup>(29)</sup>

そしてもう一ヶ所は譬喩品の一一〇番目の偈に見られるもので、そこでは

adhimukti sāras tuva śāriputra kin vā punar mahya ime 'nya śrāvakāḥ<sup>(30)</sup>

と語られており、これに対しての妙・正両経は

汝舍利弗 尚於此経 以信得入 況余声聞<sup>(31)</sup>

舍利弗身 堅固信之 仁叢如是<sup>(32)</sup>

と訳され、両者ともに信の訳がなされているかの如く見える。しかし、右の梵文の次の半偈は

ete 'pi śraddāya mama iya yanti pratgāmnikaṃ jñānu na caiva vidyate

と続けられており、信の訳語はこの半偈の

śraddāya に対してなされたものであることを知りうる。岩本裕氏はこの箇所を、堅固な意向を持っており、……

余のみを信じて歩みとなしておるが、これは信をもって入ることを得たりとする妙法華経が信を強調するために、堅固な意向を持つ信が肝要なことを基調としていると思われる。

一方、śraddhāに関するものを列記すると、それは次のようである。

K 本	妙法華經	正法華經
dūṣhraddadhēya	少有 <sub>二</sub> 能信者 <sub>一</sub>	少能信樂者
7 0	1 2 上	7 5 上
abhiśhraddadhantī	聞法信受	有 <sub>二</sub> 信樂 <sub>一</sub> 者
abhi śhraddadhītvā		
abhiśhraddadhēta	信 <sub>二</sub> 受此經法 <sub>一</sub> 者	信 <sub>二</sub> 樂斯經 <sub>一</sub>
9 3	1 5 中	7 8 下
śhraddadhe	信 <sub>二</sub> 汝所 <sub>一</sub> 說	信 <sub>二</sub> 斯典 <sub>一</sub> 者
9 3	1 5 中	7 8 下
śhraddāya	以 <sub>レ</sub> 信得 <sub>レ</sub> 入	信 <sub>二</sub> 大法典 <sub>一</sub>
9 3	1 5 中	7 8 下
aśhraddadhantā	謗 <sub>二</sub> 斯經 <sub>一</sub> 故	不 <sub>レ</sub> 信 <sub>二</sub> 此經 <sub>一</sub>
9 5	1 5 下	7 9 上
aśhraddadhantān	人不信受	不 <sub>レ</sub> 信 <sub>二</sub> 此經 <sub>一</sub>
9 5	1 5 下	7 9 上

(34)

すなわち śhraddhā の語は信或は信受と訳出されていることを知りうる。ただ註記をすれば、右の表の中、二番目の言葉は、如来を信じ、信じて……と続く文章であるために、漢訳では信受・信樂と簡潔に一度の表現ですませたものと思われ、六番目は a—śhraddadhā の形で不信を意味するために、妙法華經は不信すなわち謗となしたものとと思われる。換言すると、譬喩品においては śhraddhā の場合はあくまでも信と訳されており、adhimukti の場合はすぐれたものを棄うという意において取り扱われているといえるであらう。そしてこのようなあり方はまた、śhraddhā と adhimukti の語との間にはたとえ類似点はあるとしても、やはり相当な相異もあることを示しているであらう。<sup>⑤</sup>

〔註〕

- ① 大正9・19下  
 ② 坂本幸男岩波文庫版法華經上卷P272  
 ③ K本 125  
 ④ // 332  
 ⑤ 大正9・83下  
 ⑥ 諸橋大漢和辭典 1・798  
 ⑦ 方便品四ヶ所のうち、一ヶ所が *adhimuketi* の訳語として使われ、他は譬喩品の場合もともに *sa'dadisa* に対する訳語として使われている。尚、信樂品の品題も *adhimuketi* の訳語であり、その文中にも信樂の語あるも、これは意訳であると思われる。
- ⑧ K本 132  
 ⑨ 大正9・85上  
 ⑩ K本 110  
 ⑪ 大正 17下  
 ⑫ 大正 81上  
 ⑬ *paṭibhāṣita* に関する訳で、南条・泉共訳・新訳法華経は、これを信解と訳し岡教達訳・梵文和訳法華経は、意解或は信解的領解と訳し、二ヶ所において信解と訳している。
- ⑭ K本 44  
 ⑮ 大正9・7下  
 ⑯ K本 133  
 ⑰ 大正9・85中  
 ⑱ K本 134  
 ⑲ 大正9・85中  
 ⑳ K本 113  
 ㉑ 大正9・18中  
 ㉒ // 82上  
 ㉓ K本 117  
 ㉔ 大正9・18中  
 ㉕ // 82上

- ②⑥ K本 71  
 ②⑦ // 73  
 ②⑧ 大正九・12上  
 ②⑨ // 75上  
 ③⑩ K本 93  
 ③⑪ 大正九・15中  
 ③⑫ // 78下  
 ③⑬ 岩波版法華經 207、208  
 ③⑭ 妙法華經による限り、この表の外に、尚教ヶ所信或は信受・不信の語を見ることが出来るが、それらはすべて意訳であると思われる。たとえば九十一偈は汝等若能信受是語とあるが、これに対するK本は *vadāmi ekam imu buddha yānam pariṅghaṅgātha sarvā jina bhaviyatha* (唯一つのフツタの乗物を私は語る。完全に保持しすべてのものはジナとなれ)とあって、信受と訳されたものは、*pariṅghaṅgātha* (完全に保持する) という言葉を意訳したものである。
- ③⑮ この原稿を稿了した後に、中村元博士の仏教語大辞典が発刊になったが、それによると信 (*śraddhā*) は①信仰②心作用の一つ③瞑想の過程において生ずる六種の欠陥のうち懈怠を取り除く要素の一つ④心の滑らかさ⑤真理に対する確信等々とのべられ、信解 (*adhimukti*) は①信じて理解すること、②自己も信じ他も信じさせること、③喜び、願い求める等々とのべている。*adhimukti* は語根 *muc* からつくられた言葉であるからやはり、信ずるといふことよりも、理解・了解に基調があるものと思われる。尚、右辞典は解釈例として、但信抄の「解了の縁を仮って正しく決定する信也」をあげているが、この故であろうか。